

表紙 紙本着色草花図

深江芦舟筆

解説は27ページ参照

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

# もくじ

芸術祭今昔……………鹿海信也……………4  
 創作オペラにおもう……………宮沢縦一……………8  
 第2回全国高等学校総合文化祭を終えて  
 ……兵庫県教育委員会事務局高校教育課……………12  
 博物館交流拡大への期待  
 ——第9回日米文化教育会議に出席して——  
 ……伊藤延男……………17  
 [報告]  
 韓国文化財調査雑感……………大山仁快……………19  
 [新刊紹介]  
 『和語 漢語』(「ことば」シリーズ8)  
 『言葉に関する問答集』(「ことば」シリーズ9)……………21  
 文化庁ニュース  
 昭和53年度  
 地方文化行政担当者研修会終了……………22  
 著作権法施行令に基づく  
 指定図書館長会議の開催……………22  
 著作権審議会第24回総会開催……………23  
 著作権者不明の場合の  
 著作物の利用に係る裁定について……………23  
 文化財建造物修理用資材需給等  
 実態調査(第2期)の実施について……………23  
 重要文化財神部神社浅間神社  
 大歳御祖神社社殿の修理について……………24  
 世界現代工芸展  
 ——スカンディナヴィアの工芸—— ……24  
 ヨーロッパのポスター  
 ——その源流から現代まで—— ……25  
 民俗歳時記シリーズ 10月  
 亥の子・十日夜……………中村ひろ子……………26  
 文化財保護法教室(21)  
 伝統的建造物群保存地区の保護(I)……………28  
 美術館・博物館・文化施設めぐり⑩  
 埼玉の歴史と美術を紹介する  
 埼玉県立博物館……………30  
 国立劇場ニュース……………31

# 芸術祭今昔



鹿海 信也

(文化庁文化部長)



終戦の翌年、焦土と化し、人心の荒廃した世の中に、国民にうるおいを与え、日本にもこんな文化があるのだという民族的誇りと自覚を促そうとして開催された芸術祭も、今年で三十三回を迎える。昭和二十一年が第一回であるので、二十二年が第二回、二十三年が第三回と、年号と合っていて数えやすい。私は昭和三十四年、つまり第十四回から直接に、あるいは側面から芸術祭の仕事に関係するようになった。三十三回のうち二十回に関係するので、今昔を語られる破目になってしまった。

芸術祭もこんなに長く続き、マンネリ化したから、そろそろやめてはどうかと、世の中も終戦時とはだいぶ変わり、芸術祭の目的も違いたのではないかと、という声も一時はよく聞いたが、マンネリどころか、芸術祭の過去をふりかえると、各部門ごとに刻々に工夫改善が加えら

そういうわけで第一回の芸術祭は、すぐれた舞台芸術を国民に見せるという主催公演のみであったが、第二回からは芸術家その腕を競い合う参加公演、つまりコンクール部門も設けられた。しかしまだ初期であったから、部門も音楽、演劇、舞踊、能楽の四部門で参加数も少なく、主催公演が主であった。それが今日では一〇部門、さらにそれを細分化して一九分野に分かれて、昨年には主催公演九、参加公演二五二、協賛公演一九の合計二八〇公演となった。協賛公演というのは四十四年(第二十四回)から設けられたものである。はじめの頃から参加し、受賞歴を重ねてきた今や一流になった芸術家や団体は、回が進むにつれて今さらという気持ちと後進に賞を譲る考えで参加してこなくなった。これは芸術祭にとって淋しいことであるので、参加公演として賞を競ってもらう以外に、協賛公演として花を添えてもらう形をも考えたのである。

『芸術祭三十年史』の中に「芸術祭はそのときどきの祭典であったが、いつの間にか歴史の証人になりつつあることを知った」当初は伝統芸術の再認識といった趣旨から、催しものも概して高踏な舞台芸術、演奏芸術(主として文化財)に限られていた。その後新しいジャンル、国民大衆に近い分野の芸術である映画、大衆芸能、

れて、前向きに生き続けてきていることがわかる。昭和三十六年に刊行された『芸術祭十五年史』、先年刊行された『芸術祭三十年史』には各部門ごとのこの工夫改善の生き生きとした歩みが記述されていて、今さらながら、これまでの関係者の努力に敬意を表したい気持ちになる。

私は芸術祭大河論ということを書いたことがある。芸術祭というのは一つの大きな河の流れのようなもので、部分的には早瀬があつたり、瀬があつたり、さざ波が立っていたりするけれども、大きな流れはとうとうと流れてゆく。芸術祭も部分的には停滞や改善はあつても大きな流れは変わらない。外国には音楽祭や演劇祭など一つの分野での伝統あるフェスティバルはあるが、日本の芸術祭のような多くの分野の総合的なフェスティバルはない。この特異な日本の芸術祭を、外国の名門フェスティバルのよう

ラジオ、テレビがめざましく進出してきた」と述べられているが、一口に芸術祭と言うけれども、各部門によって、その歩み、果たす役割はたいへん違っている。

昭和二十八年にNHKと日本テレビがテレビ放送を開始したが、二十九年(第九回)からテレビ部門が設けられ、この両者から一本ずつの作品が参加した。私は芸術祭の歩みの典型的なもの、テレビ部門だと思っている。参加作品二本の出発から、「私は貝になりたい」など話題作を生みつつ、昭和三十九年には頂点に達し、参加作品三六、NHKと民放各社がしのぎを削った。その芸術主義的製作の方向は、芸術祭テレビ番組はむしろかきつけてわかない、制作者の自己満足だという批判も呼んだ。そして、電波で家庭に入り、老若男女各層の観るテレビドラマは、お茶の間芸術として庶民性を持たなければならぬという考えが出てきて、肩のこらない普段着ドラマという傾向に修正されはじめた。普段着参加ということから、芸術祭時期だけの作品でなく、年間に放送されたものでも、芸術祭時に再放送されるなら参加してもよいという、年間番組の向上をねらうての規則改正が昭和三十五年になされた。視聴率が大きく影響するテレビ芸術は、そういう条件の中で、右に左に試行錯誤を重ね、そのあるべき姿をさぐり

に、百年も続き、海外からも注目を受け、日本人も誇りにする伝統ある芸術祭へと定着させた。百年の歴史が急に来るわけではない。二十年、三十年の歩みを経て、百年の芸術祭も成り立つのである。ここ数年来同じことだからもう飽きた、といったような感覚では続くものではないなからう。

芸術祭には、「優れた作品をひろく一般に公開して、芸術鑑賞の機運を醸成」する面と「芸術家に意欲的な公演発表をうながして芸術の創造」を競い合わせる面の二つがある。今は芸術家の卵のような新人も、将来芸術祭に参加しようとしてこれを目標にして励んでいるかもしれないので、そういう点からも芸術祭というものは大きな流れとして定着した機会とすることが必要だと考える。

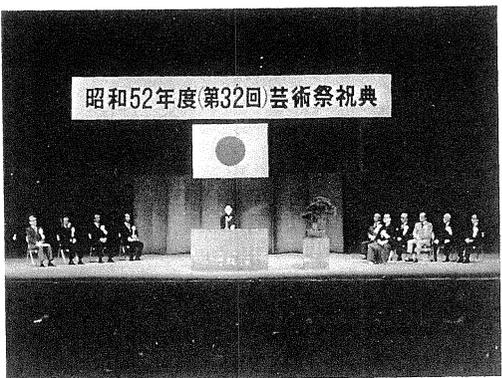
第一回の芸術祭は、当時、敗戦で自信を喪失した国民に日本のすぐれた芸能を示して民族の誇りを持たせるとともに、戦時中疎開して農耕を手助けたり、芸能から遠ざかっていた一流の芸術家に再び舞台上に戻って誇るべき腕を発揮してもらおうとして始められた。当時の関係者が手弁当で足を棒にして、かつての舞台人を探し訪ね、舞台人は涙を流して時節到来を喜んだというエピソードもある。

つつ進んできた。テレビドラマは、作家や出演者や美術装置、あるいはスポンサーの関係上、中央的な放送局でない制作困難である。そこで地方局はドキュメンタリーで勝負してきた。昭和三十八年はドラマ作品二六、ドキュメンタリー作品四の計三〇の参加であったが、年々その比率を変え、昨年はドラマ作品一三、ドキュメンタリー作品二二の計三五の参加となった。素材も豊富で、制作費も安いドキュメンタリー作品は地方局の腕のふるいどころである。ドキュメンタリー作品の参加の増加は、すなわち地方局の参加の増加であり、それにともなって地方局の受賞数も多くなった。

このようにテレビ部門は、ドラマの芸術主義からお茶の間ドラマへの転換、さらにドキュメンタリーの台頭から地方局の制作刺激への道を歩んだが、これで行きつくところまで行きついたということではなからう。ドラマ作品の芸術性がさらに模索されるかもしれない。経済難で、そう経費はかけられないといっても、やはり放送作家の腕のみせ場として、放送局もスポンサーも期待してくれる貴重な機会であることは確かである。とかく視聴率本位というか商業主義的になるテレビ放送で、消したくない貴重な機会と考えることは間違っているだろうか。芸術

祭テレビ部門の歴史は、即、わが国のテレビドラマの歴史である。

芸術祭は各部門によって歩みや事情が異なるが、芸術祭批判で感じるのは、一部門の批判があなたも芸術祭全般のことにように喧伝されることである。例えば、音楽関係者は、音楽部門に関心を持っていて、よかった、悪かったと批判するが、その他の部門のことはあまり知らない。芸術祭の全部門に目を通してというのでは無理な話でもある。だから、自分の知っている部門に対する批評を、即、芸術祭批評としてしまうことが多い。映画部門にすぐれた作品がなかった場合、「今年の芸術祭の映画部門はつまらなかった」と言うべきところを、「芸術祭はつまらない」という表現になり、さらには芸術祭廃止論にもつながることがあった。これも実を言えば、芸術祭がつまらないのではなく、芸術祭期間にさえずられた作品が出ないほど、映画界が低調であったことを意味するのである。主催公演はすぐれた公演を提供するのであるが、参加公演は参加者が腕を競い合うのであって、参加者の腕がふるわなければ不作為ということになる。今の言葉で言えば、芸術祭参加公演は参加する芸術家、あなたが主役ということである。芸術祭の祝典は、当初は十月一日、歌舞伎座



芸術祭祝典 祝辞 水谷八重子  
(昭和52年10月1日 国立劇場)

の初日ヒル興行の始まる前に、舞台に関係者と歌舞伎座出演中の俳優さんが何人か並んで、「おめでとございませう。今年の芸術祭が盛大でありますように」というような挨拶をする程度のみをされていた。三百人ほどの関係者を招待したが、歌舞伎座の客の大半は関係なく、早めに来た初日の客は、何か舞台でしているぞと戸惑いの体であった。

このような便乗型でなく、祝典には式典とともにも何か意義ある特別企画の公演を催し、多くの人々を無料招待して芸術を楽しんでもらおう四十九)、「琵琶——その音楽の系譜(昭五十)など各社が良心的に採算を度外視して製作し貴重な資料が豊富になったこと。音楽部門では、箏曲や尺八の奏者が洋楽系の作曲家に曲を依頼し、邦楽と洋楽の交流接近が活発になったこと。明治百年記念の年の芸術祭(第二十三回)にはアジア諸国から五か国を招待して民族芸能祭を開いたが、芸術祭三十周年記念の年には七か国を招待してアジア民族芸能祭を開催し、各国の格調高い民族芸能が披露されて相互理解と親善に大きな役割を果たした。そして、翌年からは芸術祭特別公演「日本民謡まつり」の中にアジア地域の二か国を毎年招待することになったこと。どれもよかったと思う。

芸術祭の目的には二面あると先に述べたが、このことが芸術祭の性格をばやかしたことは確かである。四十四年にはこれまで二か月であった期間を短縮するとともに、当初半月は主催公演のみ、あと一か月は参加公演期間というように分けることにした。そして絵画的傾向を避け、主催公演は毎年、今年には演劇に、今年は無舞踊と重点をおくことにした。もっと焦点をしばるために公演の会場を何か所かに集中させてはどうかという意見、国がある劇場を借り上げて提供し、各参加公演がそこに集中するようにして

ということになり、三十七年(第十七回)、現行の形のような祝典をはじめ開催した。はがき申し込みの無料招待者二千五百人、満員の東京文化会館でN響特別演奏会を開き、そのため三善晃氏に特別に作曲を依頼した。同氏の代表作ピアノ協奏曲はこの時生まれた作品であり、その時の芸術祭賞を受賞した。第二十回の祝典の時には、常陸宮御夫妻が、また第三十回の祝典には皇太子御夫妻が臨席されたが、三十回以降は皇族や外国大使も祝典に御招待し、ともどもに芸術の秋をたのしんでいたことに変わった。祝典では邦楽、邦舞、民俗芸能なども公演され、各国の駐日文化担当官には貴重な機会として評判がよい。

芸術祭の過去をふりかえってみると、たのしい思い出も数限りなくあるが、はじめてカラーテレビが放送された頃は、審査委員の家にカラー受像機がないので、局に集って視聴した。ラジオドラマの審査は箱根の文部省の寮に審査委員が三日間ほど籠居になり、とどらに股火鉢で暖をとりながら全作品をテープで聴いたりした。はじめの頃は受賞者には賞状と賞金をさし上げたが、お金よりも記念品がほしいと言う人もいて、あらかじめ希望を聞いてネーム等を彫った賞牌を用意し、授賞式後、賞金の一部と交換に賞牌を渡した。途端に「国は賞牌を買わせる」

はどうかという意見もある。現状ではいろいろな点でむずかしいが、第二国立劇場ができれば、現国立劇場と相まって、この問題もだいたい解決できるだろうと将来をたのしみにしたい。

第一回から第四回までは予算なしに行われた。関係者の手弁当、民間の協力でつくり上げられた。今では事務局には過去を知る人はいなくなつたが、「あの時はこうだったよ」「あれはこうしてできたんだよ」と過去の経緯を教えてください。委員は多い。委員の間には自分たちがつくり上げてきた芸術祭という意識が強い。私は民間の力でつくり上げられてきた芸術祭の原点を忘れてはならないと思う。

芸術祭は役所のほうで勝手にいろいろ変えられる代物ではない。しかし、思い切った企画を立てるには金がかかる。そういう意味からは国の力が加わってこそできたという芸術祭に発展させてゆきたい。そして、役所の最も不得手なPRによる盛り上げは、もっともって考えなければなるまい。

私は、この文章を書くに及んで人の名前は見ただけ挙げるのを避けた。芸術祭の創始者今日出海先生をはじめ、三十三年の歴史を持つ芸術祭の歩みの上に、その人のおかげと特筆しなければならぬ人の名前があまりにも多いからである。



アジア民族芸能祭 インドネシア 仮面舞踊

### 編集後記

芸術の秋の中でも、十月は最も華やかである。各地の美術展のほか文化庁主催の芸術祭も十月一日から開幕した。今年 は三十三回目になるが、主催公演の大阪での開催や、特別公演として、「ミュージック・フェスティバル'78——華麗なるクロス・オーバーの世界——」などが加わり、いっそう充実したものとなった。长年芸術祭に関係されている鹿海文化部長に「芸術祭今昔」を書いていただいた。昨年の八月号から編集を担当してきましたが、次号から庶務課課長補佐の廣田史郎氏にバトンタッチすることになりました。御指導・御協力いただきましてありがとうございます。(草場宗春)

### 広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課  
TEL(03)三二六八二二四(代表)

### 「文化庁月報」十月号

(通巻第二二二号)  
昭和53年10月25日印刷・発行

編集 文化庁  
〒100 東京都千代田区霞が関3丁目2番2号

発行所 株式会社 きょうせい

本社 千代田区中央区銀座7丁目4番12号  
営業所 千代田区新富西五軒町52番地  
電話 (03)二六八二二四(代表)

振替口座 東京 九一六一六一  
印刷所 佛行政学会印刷所

定価・一五〇円(送料二九円)  
年間購読料 一、八〇〇円